

クリスマスの思い出

塚田 實

一九八七年から九〇年までアメリカに駐在した。会社のアメリカ本社はニューヨーク州ウェストチエスター郡タリータウンのハドソン川を見下ろす丘の上にあった。家はインターステイト二八七号線を真つ直ぐ東に、車で三十分弱のコネチカット州グリニッチの一軒家を借りた。裏庭は長さ約十五メートルの軽いスロープになっており、雪が降ると子供たちはスノーボードで楽しく遊んでいた。

十一月末の感謝祭が終わると、すぐにクリスマスを迎える準備に取りかかる。大きな道路脇には様々な大きさのもみの木を売っている。家は広いので六フィート（約一八三cm）の木を求め、家に持ち込んで飾り付けが始まる。もみの木の独特の甘い香りが家中に広がった。

オーナメントは沢山買ったつもりだったが、木の直径は一番下の枝で四フィートくらいあるので、全然足りない。何回も買い足して、子供たちもわいわい言いながら飾り付ける。最後にてっぺんに星を飾り付けて完成だ。

現地小学校に通っていた娘の日本人やアメリカ人の友達を呼んでパーティーを開くと、日本語と英語が飛び交い、楽しい笑いが尽きなかった。

アメリカでは一月六日頃までクリスマスの飾りを残す。

日本に帰任が決まったとき、家族は子供の教育の都合で約六ヶ月アメリカに残った。家族だけのクリスマスは高さ約一メートルのプラスチック製のもみの木を飾り、日本に帰るときオーナメントは三分の一だけ日本に送った。二〇〇〇年から〇三年までヨーロッパに駐在したので、またあちこちで新しいオーナメントを買い、ドイツでは「キリスト降誕人形セット（クリツペ）」を求めこれも飾った。孫たちが小さいときは「踊るサンタクロース」や「メリーゴーランド」も並べた。

孫も大きくなり、コロナで行き来が減ると、夫婦だけのクリスマスになる。「どうします」「形だけでも一寸飾ろう」

十二月二十五日が過ぎると、すぐに正月飾りに切り替える。皆で大騒ぎしたアメリカのクリスマスが懐かしい。